

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「多民族ぞくニホン：
在日外国人のくらし」における多文化主義の課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戴, エイカ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001552

「多みんぞくニホン—在日外国人の暮らし」における 多文化主義の課題

タイ・エイカ

1 はじめに：展示における多文化主義

国立民族博物館（以下、民博）で「多みんぞくニホン—在日外国人の暮らし」の展示をした意義は大きい。従来、「外国人」は、入国管理の対象、外国人労働者、社会的差別の被害者といった視点から捉えられることが多かった。この展示では、こうした視点を「外国人」の側からの 이슈として示しながら、同時にそれを越え、「外国人」を、日常生活における文化、また、祭りや儀式の文化など、民族文化をもった人びととして表象した。しかも、それが、「民族」を課題とした国立の博物館で開催されたということに意義があった。研究機関でもある民博が、その27年の歴史上初めて日本に住む「外国人」を展示の対象としたことは、民族文化的存在としての「外国人」の存在証明となったと思う。

日本人訪問者にとって、「多みんぞくニホン」展は、松園万亀雄が述べるように「外国人コミュニティの形成の背景、外国人の暮らしについておなじ目のたかさから知ること」を可能にし、さらに、共生社会へ向かう第一歩になったであろう（松園 2004）。それは、「進行中の多民族化について、個人としての外国人をとおして知ることを第一目標とし、さらに共生の条件となる多様性への寛容の大切さを積極的に主張し」ていた（案内書）。言い換えれば、1990年代の半ばごろから次第に広まっていた「多文化共生」言説や実践（日本のコンテキストにおける多文化主義）のさらなる浸透を促すことが目標にあったと言える。ルーク（Luke 2002）は、博物館が、社会教育的な機関として機能し、集団が共有する価値観の形成に寄与すると述べている。短期間ではあったが、この展示は、訪問者に多文化主義について社会教育を施していたと考えられる。

以下では、この展示における多文化主義のあり方について批判的な考察を試みたい。最初に述べておきたいのは、「外国人」の存在証明に貢献したという意味で、展示は、多文化主義の肯定的な目標の1つを成し遂げたということだ。また、多文化主義について理解の深いプロジェクトチームのメンバーは、それが引き起こす文化本質主義の問題について熟知しており、それに陥ることなく、いかに「文化」を表象するのか、という課題に慎重に取り組んだ。メンバーは、論議を深め、クリエイティブで多様な方法を採用することで、「文化」を、同質で統一された静的な実体として表象することはなかったように思われる。そうではなく、展示の「文化」の表象は、民族間の相互関係性や歴

史的、政治的な側面を取り入れた視点からなされ、また、個人の生活体験に着目したものであった。また、その表象のプロセスに展示の対象であった「外国人」に積極的に参加を促し、主催者側による「外国人」の「文化」のカテゴリー化の回避に努めたと言える。むしろ、展示が「外国人」の「外国人」による文化的存在証明の場になるように、という意図さえあったとも思われる。プロジェクトチーム自体が多民族であったことにも、こうした意図がうかがわれる。以下の批判は、将来の課題となっても、こうした開催の意義を否定するものでは決してないことは断っておきたい。

「多文化主義」の批判的視角からみると、展示には「民族」の表象をめぐるいくつかの問題があったように思われる。以下、6つの点を論じてみたい。これらの点は、日本における「多文化共生」言説や実践における一般の問題と共通しており、展示もこうした問題を同様に抱えていたと言っている¹⁾。教育領域や地域行政において現在進行中の「多文化共生」言説や実践は、基本的には「単一民族国家の神話」のそれとかわらぬ問題を包含していると私は考えている。「日本人」という主流の「民族」の特権性が問われることがなく、また、「白人」と「アジア人」との関係性において「日本人」が再生産されているという意味において、この2つの言説／実践は共通しているのだ。展示における「多文化主義」も、こうした問題を乗り越えてはいなかったと思われる。

2 「外国人」と「日本人」

第1の点は、「外国人」に焦点を当てることによって、「多みんぞくニホン」が、民族的に多様な「外国人」が日本に存在する、といった意味になってしまったのではないかと、いう点である。アイヌや沖縄をめぐる、日本国民国家の「内部」にある文化的、また、民族的な多様性が忘れられ、「単一民族国家」の神話が温存されてしまったのではないだろうか。もちろん、何が「内部」なのかという根本的な問題もそこには存在しているのだが。「アイヌの文化」の展示は、「日本の文化」のコーナーとは別に位置されているものの、本館に常設されている。アイヌに関する展示は、特別展示館でも1980年代から何回か開催されており、「多みんぞくニホン」展の直前にも「アイヌからのメッセージ—ものづくりと心—」展が催された(2004年1月8日～2月15日)。言い換えれば、「アイヌ」は、「多みんぞくニホン」を構成していないことになる。沖縄について言えば、2003年10月2日から2004年6月1日まで「あじまあ 沖縄の伝統と暮らし」という展示が本館で催され、「多みんぞくニホン」は、ほとんどこの期間内に同時開催されていた。偶然であったとは言え、訪れた人の中には、「沖縄人」と「外国人」の境界を意識的に、または、無意識に感じ取って帰った人もいただろう。多言語コミュニティ放送局FMわいわいなどによって、沖縄の音楽などが流されたりはしたが、やはり沖縄は、「多みんぞくニホン」に入っていたとは言いがたい。

庄司もプロジェクトチームのメンバーも、アイヌや沖縄をめぐる問題は認識していた。彼は、「日本文化の多様性は、いまにはじまったものではないし、単一民族論がそれを無視しおさえてきたことも理解している」と展示の解説書で述べている（庄司 2004：13）。確かに、アイヌや沖縄の人びと、また、その「文化」を、「日本人」や「日本文化」とどう関係づけるのか、という問いは、展示を離れても、政治的に、また、文化的に、複雑なイシューを包含している。逆に言えば、展示において、この問題は保留とされたということであり、「単一民族国家」の神話に内在する根本的な問題にまで切り込まなかったということである。主流派日本人の訪問者は、先頃「多文化」という言葉をよく聞くようになったと思うが、展示の場で「多文化」なのは「外国人」なのだと「日本人」の単一性を確認し、帰途についたかもしれない。

そうであるなら、博物館の教育的な機能を通し、訪問者は「外国人」のくらしを学びながら、ナショナリズム的な言説を再習得してしまったことになる。リー（Lee 2003）が述べるように、多文化主義はナショナリズムによって取り込まれてしまう可能性を内包している。アンダーソン（Anderson 1991）によれば、博物館はナショナルな想像を育む場である。民博の本館がそうした場であるならば、特別展は、本館の役目を補足したことになる。フジタニ（Fujitani 1997）は、米国ロサンジェルスの日系アメリカ人の博物館がいかにナショナリズムの主流の言説に貢献してしまっているかを鋭くえぐりだしているが、「多みんぞくニホン」展についても同様なことが言えるのではないだろうか。

庄司は、展示でアイヌや沖縄を取り上げないのは、「外国人」に焦点をおいているからだとして説明している（庄司 2004：13）。しかし、それなら、今度は誰が「外国人」なのかという問題が浮上する。これが第2の問題である。庄司はこう述べている。「『外国人』はたんに外国籍の人、外国人登録に記載された人に限定はされていない。本人あるいはその祖先が外国、外国文化、外国語などにルーツをもち、いわゆる『日本人』の категорияから排除されがちな人びとをひろくとりあげる」（庄司 2004：13）。種々のケースをもってする彼の説明からは、「外国人」と「日本人」の明確な境界は立ち上がらず、むしろ、その境界のゆらぎが鮮明になっていく。「多みんぞくニホン」展が「単一民族国家」の神話を越えていく可能性があるのだとしたら、それは、例えば、ここに潜んでいると言えるだろう。しかし残念ながら、展示会場に掲げた彼の「外国人」についてのコメントは、彼自身が認めるように訪問者の注意をあまり引いたとは思われない。

しかし、「外国人」と「日本人」の境界について考える時、それを作り出している線引きの中で、最も重要な線引きのあり方について、特に配慮しなければならないだろう。国籍によって保証されている市民権の問題である。外国人への排除や差別は、文化の違いや心理的な排除の思考からのみ立ち上がるのではなく、日本国籍者へののみ付与さ

れている市民権—選挙権だけでなく、福祉を受ける権利、国外追放を受けない特権など—の欠如によって引き起こされている。民族文化に焦点をおいた、この展示においては、前者の問題のみが扱われていたように思える。それは、確かに展示の1つのキーコンセプトである「寛容さ」によって改善できるかもしれない。また、境界のゆらぎを照らし出すことによって、排除の思考そのものを無効にすることもできるかもしれない。しかし、現実的には後者による被害の方がずっと深刻であると言っていいだろう。現状では、日本国籍があるかないかによって、市民権に大きな違いがあるのだが、日本国籍の取得は、以前より改善されたとは言え、やはり、同化主義的なプロセスを通してしか達成しえない。また、国籍取得自体が難しく、そこに、日本の外国籍者について「移民」という用語が浸透しない理由の1つがあるのではないだろうか。英語の展示名では、外国人を、当該国の国籍者になることが想起されるimmigrantsと訳していたところに、この問題を回避したことが表されていたように思われる。

3 「アジア人」「白人」「日本人」と日本帝国主義

第3点は、展示されていた「外国人」は、アジア系の人びとが主流で、西欧系や北米系の「白人」がほとんど不在であったということだ。確かに、入り口の顔写真の中には、「アメリカ」という国名のもとに白人系らしい顔があり、また、差別のコーナーでは、白人系の人びとへの差別問題も取り扱っていた。また、2階で展示された「在日ブラジル人」には、白人系の人も入る。しかし、日系人に対し特別な入国や就労を認める1990年の法的措置により、白人系の在日ブラジル人に占める比率は高くない。全体を眺めたとき、「白人」不在の印象を受けてしまうことは否めないだろう。筆者が展示場を訪れたとき、たまたま居合わせた白人系アメリカ人から、白人系の「外国人」の展示がないという批判的コメントを聞いた。彼女はそれを排除として受けて止めていた。この点についてプロジェクトチームは論議を重ねている。「白人」は、日本において排除の対象にはなっているものの、同時に、特権を与えられている。例えば、ヨーロッパ系の言語は、称賛をもって向かえられる傾向にあり、また、外国人登録証などの公式の書類でハングルなどの使用が不可能なのに対しアルファベットは使用可となっている。こうしたことを考慮に入れ、ヨーロッパ系の人びとは展示の対象としなかったのである。しかし、展示会場での「白人」の不在は、その存在が実際の社会においては顕著なだけに、逆説的に「白人」の特権的存在の追認になってしまったと言えないだろうか。「白人」の存在は、自明視され、「外国人」として無標化されてしまったということだ。「多みんなぞくニホン」に「白人」は入らない。それは、有標な「外国人」であるアジア系の人びとからなっているのだ。

米国、オーストラリア、カナダの多文化主義の論議のなかで、「白人性」が問われる

ようになって久しい。「白人」が文化、経済、政治などの広範な領域でいかに特権を持っているか、また、そうした特権がどのような歴史的状況のなかで生み出されてきたのか、などといった設問がされ、研究が進んでいるのだ。日本における多文化主義については、「日本人」の特権性が問われはじめたところだ。この問題は、「外国人」に焦点を当てたという今回の展示ではほとんど扱われていなかったように思う。しかし、「外国人」の展示であるから「日本人」について問う必要がないと論じることができるのだろうか。逆である。「外国人」は「日本人」との関係性において立ち上がる概念であり、後者の検証なしには前者の論議は深まらない。

第1の点との関係において第3点を考察するとき、見えてくるのは、「白人」と「アジア人」との関係において再生産される「日本人」である。「日本人」は展示会場では、「白人」と同様に不在である。ただ、他の「アジア人」の展示を眺める者として訪れるのみである。「多みんぞくニホン」展における「日本人」の不在は、他のアジア系の民族に対する「日本人」の特権的地位を認めたことを示唆しかねない。「白人」が「ニホン」において特権化されているのなら、「日本人」は「多みんぞく」に対して特権化されている。この構図は、プロジェクトチームが歴史のコーナーで批判的に取り扱った「大東亜共栄圏」に近似してはいないだろうか。「多みんぞくニホン」展は、この権力関係の構図を越えたところで、多文化共生を主張しているとは言いがたい。

第4の点は、展示は、その歴史コーナーで日本が過去に「多民族帝国」であったことを明確に示しているが、戦後日本の経済的帝国主義やその路線上で引き起こされている現在のグローバル化した日本の資本主義についてはほとんどふれていなかった、ということだ。多文化共生の言説において、オールドカマーについては、「過去の歴史」が表面的にでも問題にされるのに対し、経済帝国主義の権力構造のもとで渡日したニューカマーについては、日本の責任を問われることがほとんどない。植民地主義の歴史についても、戦後補償などの問題が清算されておらず、また、旧植民地出身者の戦後日本の法的、社会的取り扱いと同化政策に近く、「過去」の歴史とは言えない。植民地主義に端を発した種々の問題が引き続いて存在する、という意味において、現在の日本は、いまだポストコロナルな状況にあると言える。ある在日コリアンの活動家がいうように、進歩主義的な日本人も、過去の歴史についての責任について語るものの、その歴史が続けて引き起こしている問題についてまで言及する人はまれである。「多みんぞくニホン」展は、現在の日本の問題を個別の差別の視点からとらえていても、構造的な視点は取り入れてはいない。

過去の植民地主義のもとでは、同化の程度、つまり、日本国家や天皇への忠誠の度合や日本語習得の度合を基準にして、被植民者の序列化が行われた。現在の日本に居住する「外国人」の間にも、また、序列化が見受けられる。シパーは、在日外国人が、国籍によって序列化され、それにしたがって労働市場で階層化されていると指摘している

(Shipper 2002)。展示の解説書では、古屋哲が「法的地位の階層秩序」について論じてはいる。しかし、展示の会場では、「外国人」は、民族文化的には異なるグループとして表象されているが、法的、経済的な意味ではとくに分けられてはいない。異なる「外国人」が異なる排除や搾取をされているというところまでは立ち入っていない。そこで隠蔽されているのは、日本の政府や経済界の「外国人」をめぐる構造的な支配体制である。

4 「文化」の内なる多様性と「文化」の境界

第5の点は、大多数の「外国人」のくらしや文化が展示から排除されてしまったことである。展示は、限られた空間と限られた時間で仕切られている。そういう意味で、この点は、批判として成り立たないとも言えるだろう。確かに、プロジェクトチームは、空間と時間が許す限りにおいて、2階に展示されたそれぞれのグループの内部の多様性を示してはいた。しかし、展示が、特定の民族的文化やアイデンティティに焦点を当てていたことは否めない。例えば、在日コリアンの子どもに関して言えば、民族学校の生徒の作品が多く出品されていたが、実際には、民族学校へ行っていない子どもが大多数を占めている。スタイナーは、「文化」を生産する機関としての博物館が、いかに特定のアイデンティティを正当化してしまうかという疑問を投げかけている (Steiner 1997: 3)。「外国人」であるとラベル化されながら、対外的に呈示できるほど異なる「文化」を習得していない子どもたちがいる。日本の戦後のインフォーマルな同化政策の影響を受けている子どもたちである。しかし、こうした子どもたちの中には、従来のカテゴリーをまたぎ越すような、ハイブリッドな「文化」を体得している子どもたちもいる。そんな在日コリアンの子どもたちの「文化」やアイデンティティは、展示会場には見い出せなかった。さらに言えば、先ごろの国際結婚の増加がもたらしている、「文化」やアイデンティティのハイブリッド化も、展示の課題に入っていたとは言いがたい。

展示において、「文化」の内部の多様性はある程度着目されたが、「文化」をまたぐハイブリッド性は置き去りにされてしまったと言える。プロジェクトチームは、その文化本質主義についての取り組みにおいて、この点までは踏み込まなかったようだ。文化本質主義をどう切り開くのかという問いに対し、民族の「内部」の文化的多様性のみに着目しているのなら、逆に、「文化」の境界を強固にすることに貢献してしまいかねない。古屋は解説書で「定住外国人」と呼ばれる人のくらしに「出身地域・国と結ばれた境界横断的な生活空間がある」と指摘している (古屋 2004: 40)。ディアスポラ空間とも呼べるようなこうした空間においては、ナショナルな文化はその境界のあいまいさを露呈せざるを得ず、文化のハイブリッド性が前面に押し出されてくる (Brah 1996参照)。「外国人」を、「在日」という視点からだけでなく、出身地域・国をまたぐディ

アスポラ的な視点からとらえるならば、多文化主義がナショナルな支配のロジックに転じてしまうことへの批判の途が開かれてくるかもしれない。

5 おわりに：多文化共生と博物館

最後の点は、展示の目標のキーコンセプトになっていた「寛容さ」と「共生」という用語の意味についてである。多文化主義の批判的考察において、誰が誰の文化を認めるのか、という権力の問題が論議されてきた。この展示においては、主流派日本人による「外国人」に対する、また、異なる民族文化に対する、理解や寛容さが求められていたようだ。しかし、共生社会へ向かうために必要な共生的な態度とは、高橋（2004）が述べるような「加害可能性を前提にしたホスピタリティ（歓待精神）」ではないだろうか。複雑に繋がりがあっている近代資本主義下の現在の社会にあっては、「自分の加害性を抜きに『他者の苦痛を苦しむ』ことは（中略）暴力的である」と言える。展示が共生社会を目指していたのなら、「寛容さ」だけでなく、自分自身の社会的位置を考えさせる、こうした共生的な態度の育成を視野に入れることが望ましかったかもしれない。しかし、ネオナショナリズムの傾向がますます深刻化する現在の日本社会においては、「外国人」に対し、まずは、「寛容さ」が求められているのかもしれない。そういう意味で「寛容さ」を展示の目標にしたことは、時代的状况に適した選択であったとも言える。そして、展示は、「寛容さ」の学びから、多民族化についてさらに思考を深めていくための示唆には富んでいたと思われる。

以上の6つの点について、プロジェクトチームは、認識はしていたのではないかと思われる。しかし、時間や空間の制限のなかで充分に取り組むことができなかったのだろう。「多みんぞくニホン」展は、博物館展示のあり方、また、多文化共生のあり方について、種々の課題を生み出したと言える。今後の取り組みに期待したい。

注

1) これらの点は、筆者の別稿をもとにしている（Tai 2006）。

文献

庄司博史

2004 「いずれ、おとずれる共生社会のために—多民族化の息吹をつたえる」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団、6-14頁。

高橋 舞

2004 「加害可能性を前提にしたホスピタリティ（歓待精神）—共生教育で提案される共生的な態度—」『異文化間教育』19：85-101。

古屋 哲

2004 「管理から共生へ—ニホンはどこまで「多みんぞく」になったか」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団，30-40頁。

松園万亀雄

2004 「ごあいさつ」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団，3頁。

Anderson, Benedict

1991 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. New York: Verso.

Brah, Avtar

1996 *Cartographies of Diaspora: Contesting Identities*. London: Routledge.

Fujitani, Takashi

1997 National Narratives and Minority Politics: The Japanese American National Museum's War Stories. *Museum Anthropology* 21 (1): 99-112.

Hage, Ghassan

2000 *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*. New York: Routledge.

Lee, Michelle Anne

2003 Multiculturalism as Nationalism: A Discussion of Nationalism in Pluralistic Nations. *Canadian Review of Studies in Nationalism* XXX: 103-123.

Luke, Timothy W.

2002 *Museum Politics: Power Plays at the Exhibition*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Shipper, Apichai W.

2002 The Political Construction of Foreign Workers in Japan. *Critical Asian Studies* 34 (1): 41-68.

Steiner, Rebecca Cramer

1997 Introduction: Museum, Exhibitions, Collecting. *Museum Anthropology* 20 (2): 3-4.

Tai, Eika

2006 Redefining Japan as “Multiethnic”: An Exhibition at the National Museum of Ethnology in Spring 2004. *Museum Anthropology* 28 (2): 43-62.